

地域ネットワークだより



SDGsをキーワードに九州、台湾、アメリカの企業、団体のトップやノーベル賞を受賞した世界トップクラスの研究者らが集まり、経済交流を進めるフォーラム「九州・台湾クリエイティブウイーク」が11月15日から薩摩川内市で行われました。

薩摩川内市は昨年5月、内閣府のSDGs未来都市に選定され、廃油回収やメーカーと一体となったプラスチックごみの分別など市民総ぐるみのリサイクル推進や資源循環施設の整備を進めています。

「九州・台湾クリエイティブウイーク」は、九州と台湾の連携を強化し、持続的な経済の活性化につなげようと薩摩川内市と、いちき串木野市出身でアメリカ・スタンフォード大学の西村俊彦教授、台湾大学の柯承恩名誉教授らが呼びかけて開催したものです。

フォーラムでは学識経験者やベンチャーキャピタルの代表、医師らが企業のSDGsや脱炭素化、人材育成などをテーマにシンポジウムを行ったほか、ノーベル物理学賞を受賞した名古屋大学の天野浩教授らが、未来の脱炭素社会の実現に向けて貢献する先端の科学技術について意見交換しました。



また、熊本で工場を建設中の台湾の半導体メーカー・TSMCのLora Ho上級副社長も登壇し「環境配慮に前向きな地域企業との成長を大切にしている」とビジネス戦略について講演しました。そして最終日には、地元の田中良二市長が「持続可能でより良い未来の実現に向けて飛躍すべく、成長志向で行動し続ける」とする「薩摩川内宣言」を発表しました。

MBCはこの1週間を「薩摩川内市SDGsウィーク」として、連日、薩摩川内市のSDGsの取り組みやフォーラムの様様を「かごしま4」や「MBCニューズナウ」でお伝えしたほか、来年1月には「九州・台湾クリエイティブウイーク」の概要と資源循環型都市の実現を目指す薩摩川内市の取り組みをテレビの特別番組で放送することになっています。

2023.11.04[SAT]-11.12[SUN]

70周年スペシャルウィーク ありがとう！ これがらもとともに！



MBCは1953年10月10日に鹿児島初の民間放送「ラジオ南日本」として開局しました。創立70年の歴史はMBCラジオの歴史そのものです。11月4日からの9日間は、リスナーのみなさまに70年の感謝を含めたスペシャルプログラムをお送りしました。

スペシャル企画や特別番組 県内各地からの中継



中には重さ17kgの超大物・チャイロマルハタも上がり、釣り人たちは大興奮していました。

「土曜ラジオ!」と「青だよ!たくちゃん」では、釣りガール上園歩美さんが13人のリスナーと錦江湾に浮かぶ釣りいかだから釣りの模様を生中継。約3時間ほどでマダイやハガツオなど14種類50尾を釣り上げました。



「たけまる商店営業中!」ではゲスト落語家の桂米助(ヨネスケ)師匠が、「突撃!かごしまdeお昼ご飯」として鹿児島市内の和食店から中継しました。七五三祝いの家族連れで賑わう店内でインタビューした男性は、偶然にもヨネスケ師匠が1994年に「突撃!隣の晩ご飯」で自宅を取材した人で、30年ぶりの奇跡の再会を喜んでいました。



伊集院光さんゲストに 7時間生放送!

11月11日はラジオの帝王と呼ばれる伊集院光さんをゲストに7時間の生放送をお届けしました。

伊集院さんは芸名をつけるときに高貴な響きにひかれて「伊集院」と自ら名付けたそうです。その後、伊集院町を一人旅で訪れたことや、ローカルラジオならではのリスナーとパーソナリティの距離の近さについてパーソナリティの野口たくおさんと語り合いました。



かごしま 移住相談会 IN 東京



コロナ禍以降、働き方や生き方に対する意識が変わるとともに、テレワークの普及などもあって、地方移住への関心が高まっています。こうした中、首都圏から鹿児島への移住を考えている人を対象に、鹿児島の魅力をPRするイベント「かごしま移住相談会IN東京」を11月5日(日)、東京・有楽町のふるさと回帰支援センターで開催しました。

「かごしま移住相談会IN東京」は、鹿児島への移住を促進するために県が開いたもので、MBCは本イベントの企画・運営を担当しました。対面開催は2年ぶり、当日は関東近郊から鹿児島への移住を検討している約30人が参加しました。

実際に鹿児島へ移住した先輩移住者の体験談を伝える「先輩移住者トークセッション」では、東京から南九州市に移住した岩崎泰依さんが、移住を決断したきっかけや南九州市での暮らしの魅力について紹介する一方、田舎暮らしで困ったことなども率直に語りました。



岩崎さんが「東京では考えられないくらい食べ物美味しくて安い」「家賃もリーズナブルで1人で7DKの一軒家に住んでいる」などと写真を交えながら暮らしぶりを紹介

すると、参加者からは驚きの声が上がっていました。

また、会場には、日置市、中種子町、宇検村など10市町村がブースを出展し、それぞれの町の良さをPRしました。担当者も多くが県外からの移住経験者で、「ネット通販も利用できる所以で利便性は都市部とさほど変わらない」などとPRする一方、「(島は)湿度が高く洗濯物が乾かない」「ご近所づきあいが苦手な人は大変」など自身の経験を披露し移住のメリット、デメリットを説明していました。



イベント後半には、各自治体の移住担当者と参加者が車座になり、打ち解けた雰囲気の中で、移住相談が行われました。参加者は「今は車を持っていないが大丈夫か」などと、抱えている不安や疑問を移住担当者に質問し、その説明をメモをとるなどして、熱心に情報収集していました。

この「かごしま移住相談会」は、11月26日(日)に大阪で開催するほか、オンラインでも来年2月まで毎月実施する予定です。



テレビ番組「かごしま4（月～金/午後3時49分～）」で放送した各地のメディア発の話題です。

資格がとれる 鹿屋市の ドローンスクール



勝手におおすみプロモーション（10月27日放送）

2015年に閉校した鹿屋市高須町の高須中学校は、今、民間が運動場や体育館、職員住宅などを管理、運営する「パーク高須中」として活用されています。宮内ありさレポーターが、ここでドローン関連の事業を展開しているシスルナベースの浜洲充哉CEOを訪ねました。

海上自衛隊でヘリコプターを操縦していたという浜洲さんは、今年1月ドローン会社を設立し、ドローン教室を開講しているほか、ドローンを使った農薬散布や防災点検などを行っています。

パーク高須中の広い運動場や体育館はドローンの練習にはうってつけで、授業のほか愛好者に自由に使ってもらったり、時には農薬散布の練習場としても開放しているそうです。

教室には子ども向けのコースもあり、浜洲さんは「まずはドローンを楽しんで興味を持ってもらい、世界に羽ばたくドローンパイロットを育てていきたい」と話していました。



種子島の 移住者たち



タネナンダTV（11月6日放送）

タネナンダTVの川越れい子さんが種子島に移住してきた個性的な2人を紹介してくれました。

1人は中種子町でカフェバー兼ライブハウス「Bamboo Forest」を経営する竹林直紀さん。旅好きだった竹林さんは、種子島の友人を訪ねてきたことがきっかけで25年前に移り住み、2年後に店を始めました。アジアンフードを提供しているほか、竹林さんが海外で見つけてきたグッズも販売しています。最近は自分で育てたモリンガ茶とホーリーバジル茶も販売していて、竹林さんは「種子島では、物や人の成長を感じられることが多くて、そういうときに幸せを感じる」と話していました。

もう1人は、西之表市の養蜂家・猪狩寛大さんです。福島県出身の猪狩さんは、東日本大震災をきっかけに11年前に移住してきました。独学でニホンミツバチの飼育法を学び、当初は2つの巣箱でスタートしましたが今では10箱に増え、数量限定ながらハチミツの販売もできるようになりました。今年は豊作で、巣箱からあふれだすほどたっぷりの蜜が採れており、猪狩さんは「島の恵みに感謝しながら、少しずつ事業を広げていきたい」と話していました。

2人の共通点はサーフィンが趣味というところで、サーファーを惹きつける種子島の魅力を改めて感じるレポートでした。



密着！ ながしま造形美術展 への道



いずみテレビ（11月9日放送）

10月14日、長島町の太陽の里ピクニック公園でながしま造形美術展が始まりました。この美術展は地域の自治会や学校、企業、団体が身近な素材を作って制作する巨大なオブジェで知られています。いずみテレビの椎木重治さんは塩追集落の人たちが制作した「しゃちほこ」の搬入作業に密着しました。

しゃちほこは高さ6メートル、幅4メートルで、制作に約2か月

かかりました。集落の半分以上にあたる約80人が制作に関わったそうです。集落から会場までは約4.5キロ離れていて、台車に乗せられた「しゃちほこ」はショベルカーでゆっくり引っ張られていきます。2時間45分かけて会場に到着すると、作業にあたった人たちはほっとした様子でした。会場には90体の作品が展示されており、連日大勢の人で賑わったそうです。

